

NEXT STAGE 上

星条旗の失墜と五星紅旗の破断

司武

NEXT STAGE 上

星条旗の失墜と五星紅旗の破断

司武

目次

3.	2.	1.
宮古海峡	N E W W A V E	オ ー シ ヤ ン ラ イ フ

主要登場人物

徳大寺重里抄…女性海洋エンジニア、オーシャンライフプロジェクトの推進者

木村一也…オーシャンライフプロジェクトのメンバーの一人、世界的な投資のプロ

藤原直哉…オーシャンダイナミックのコンセプトクリエーター、プロジェクトリーダーの一人

優秀な海洋エンジニアでかつ優秀なソフトエンジニア

野口亘…若手政治家、オーシャンライフプロジェクトのメンバー

前田和義…日本の首相

山本定行…保守党の幹事長、のちに首相

リチャード トーマス…アメリカ大統領

ナジ ウィリアムス…大統領首席補佐官

トニー ブラッセル…安全保障担当首席補佐官

ロバート サマー…アメリカ海軍作戦部長

はあり スミス…アメリカ軍戦略軍司令官

ジョージ カーペンター…フェニックス軍需複合体の会長

竜南平…中国国家主席

林中広…中国中央軍事委員会副主席

陳華清…中国海軍長官

定同相…中国北海艦隊司令官

郭至善…中国サイバー軍司令官

1. オーシャン ライフ

「謎の米軍宇宙機、基地に帰還！ 地球を22ヶ月周回」

その日、木村一也は帰宅途中、東京駅ホームのキオスクの新聞売り場で日刊紙の一面に大きく書立てられているこのコピーを見た。余程ニュースがなかったかなと思いつながら。

彼はいつもは車で神谷町の自分のオフィス、オーシャン ダイナミックス、まで通うが、その日は訪問先のオフィスへのアクセスが便利なので電車で出かけていた。その日の自宅への帰りに、たまたまキオスクの新聞売り場でその記事を目にした。

一也はこの記事を見て、何か引っかけを感じた。それが何かははっきりしてこないのだが。

一也は地下鉄有楽町線の豊洲で電車を降りると、海の見えるタワーマンションの自宅に向かって歩きながら、そのうち直哉とこの件を話してみるかと頭を巡らせていた。一也はタワーマンションの最上階のフロアーの一角、東京湾を見やることのできるサイドに、妻の早苗と8歳になる娘と6歳になる息子の4人で住んでいた。5年前までアメリカのサンノゼに住んでいたので、子供たちは日本語と英語を自由に使えるバイリンガルだ。一也の部屋からは、東京湾を輝く照明を煌びやかせながら多くの船舶がゆつくりと航行しているのが見える。それを好きな曲を聞きながら眺めているのが一也の息抜きの一つだった。この日は大きく力強い波動を覚えるラフマニョフのピアノ協奏曲第二番だった。身体の底から、一日の歪みを戻してくれる。アイボリーの大きなソファアーにゆつたりと体を沈めながら、前方の大きなガラス窓を通して東京湾を見ていたが、やがて目を閉じた。その日、駅のキオスクで見た新聞の見出しが頭の中に蘇っていた。

「米軍の宇宙船の謎のミッシェン！」

以前から米軍が何か秘密の宇宙システムを構築しているのではないかと噂されていた。一也もその噂についてはしばしば聞いていた。しかしその具体的な中身が解らない以上、自分のビジネスにどう関係するか解らない。これまでそんなことはほとんど忘れていた。その日、新聞の大きな見出し記事を見て久しぶりに何か引っかけかを感じたのだった。どこかで自分の投資行動にかかわりを持つような何かが起きようとしているのじゃないかと。投資家特有の感だ。

一也は42歳、色白で丸顔、やや太り気味の比較的小柄な明るい性格の男である。投資コンサルタントで、投資の専門家として世界中の資金提供者とビジネス情報のチャンネルを持つている。これまでお金になりそうな新しい技術を見出して、ファンドを立ち上げて投資し、それらの技術を社会に引き出す助けをして来た。そのほとんどは期待を裏切り量産まで行きつかなかった。それでもいくつか大きな宝を掘り当て、若くして巨額の金を手に入れていた。スマートフォンの画像認識のアプリに使われているアルゴリズムの開発にも投資して利益を上げている。保有する資産はほとんどが海外にあるが500億円をくだらない。5年前に日本で新しいプロジェクトを立ち上げた。その時に家族を伴って東京に戻ってきた。

効率と利益だけを追求する社会に子供たちの活力のある未来が見出せないと確信して新しい文化を作り出す活動を始めることを決めたのだ。そのコンセプトを藤原が提唱する、オーシャン ダイナミズム、に見出した。そのコンセプトを実現させる新しい文化パターンを創出するプロジェクト、オーシャン ライフ、を推進する為に、オーシャン ダイナミックス、と言うラポ オフィスを藤原直哉と立ちあげ、その資金面を支えて来た。彼は技術開発分野の投資家の立場で軍事情報、兵器情報にも常に注意を払って来た。

パートナーの藤原直哉も42歳。身長180cmで良く日焼けした、見た目にも健康そうな、目に勢いのあるハンスサム男だ。木村と藤原は高校の同級生だった。藤原はいくつもの海洋プラントをデザインして来た優秀なコンセプトデザイナーであるとともに、オープンな社会を構成するソフトウエアの重要性を認識できる優れたソフトウエア エンジニアでもある。彼とその仲間たちがオーシャン ダイナミックスの、オーシャン ライフ、プロジェクトを実際にマネージメントしている。六本木の高層マンションの25階に一人で自由に暮らしている。オーシャン ダイナミックスへの出社は時々軽快なサイクリング用自転車だ。学生時代は水球の選手だった。体力には相当の自信を持っていた。

直哉は大学時代に飛行機から眺めた海洋の圧倒的な存在感に惹かれた。太平洋のあちこちに広大なブレインを浮かべてそれをベースに様々な文化パターンを展開すれば新しい文化が創造できるのではないかと考えるようになった。筑波の海洋開発機構に所属しながら新しい文化、海洋文化パターンの創造とそれを支える構造物の研究を進めていた。その中でオープンな社会インフラのコンピュータコントロールとその脆弱性についても研究していた。

徳大寺亜里抄は京都の名門のお嬢様だ。40歳で独身のスーパー レディだ。巴建設の海洋構造物開発のリー

ダーで、女性的優しさを感じさせながら豪快さを備えた構造物を創り出す。海の太陽に焼けた褐色でスリムな大柄な、誰もが認める美貌の持ち主である。休暇には自分のクルーザーを乗りこなしている。

亜里抄もまた一也達と同様に、社会の効率化とその継続だけでは若者たちを生き生きとさせる社会、活気のあるダイナミズムのある社会を作れないと考えていた。彼女も藤原と同様、海洋に新しいダイナミズムを展開する事が、日本の若者に活気を取り戻すトリガーになると確信していた。

彼女はいくつもの海洋プラントをデザインして様々な賞も受賞して来た。彼女は単なる机上デザイナーではない。海上の現場で指揮を取れるデザイナーでもある。美人女性と海上構造物の設計者で現場指揮者というイメージのミスマッチも、現場で彼女を見れば実に良く合っていることに驚かされる。世間一般の理解では若い女性が憧れるスーパードレイド。麻布の高層マンション30階に一人で自由に暮らしている。巴建設からオーシャンダイナミックスへ出向している。オーシャンダイナミックスへの出社は赤いボルシエだ。学生時代にヨットで鍛えた体力には相当の自信を持っている。マスコミの話題性に事欠かない。

直哉と亜里抄が、オーシャンダイナミックス、コンセプトを実現する海洋プロジェクト、オーシャンライフ、の共同プロマネかつ共同デザイナーである。デザイナーのデザインも彼らがこなしている。

、オーシャンダイナミズム、は広大な海洋でエネルギーを自給して、海洋の空中、海面、海中の自由な空間をシームレスに利用して、陸上の呪縛された関係から独立した、社会活動を実現しようというアイデアである。少なくともそのエリア内では、ノイズを許容する多様な価値観、ダイナミズムを実現している社会を創り出すコンセプトである。

木村と藤原は40歳の時、そのコンセプトを実現させるためのベンチャーラボ、オーシャンダイナミックス、を立ち上げた。そのあと徳大寺と野口が加わった。

若くして都議会議員を2期務めた野口は45歳で、3年前、日本が自分を守るための独自の軍事力を保有しそれを行使する権利を持つのは当然だ、と強く主張するとともに、新しい文化パターンを作り出す先頭に立つ、と宣言して、無所属で衆議院選挙に東京の選挙区から出馬して当選した。彼は若手の政治家として注目を集め始めた。そんな野口を知った保守党の幹事長の山本が、彼を若手の有能な政治家として自分から接近して、自分のブレインになることを依頼したので。野口は山本が強力な軍事力保有を最優先させる単純な軍国主義者でなく、既成の価値観を越える包容力を持ち、閉塞した社会に新しい文化パターンを導入して、活力のある社会をつ

くる行動を許容出来る人物だと知った。それで彼の力を利用してみようと思われ、彼のブレインになったのだ。同時に、木村たちのオーシャン ダイナミックスの活動を知り、そのアイデアに共鳴してそのメンバーになった。野口は政治家として、若い人たちに活力を与えることができる活動の可能性を見出したのだ。

木村達4人は長く閉塞感に覆われて、活力を忘れてしまった先進国と称される世界の若者たちが活力を取り戻した社会にするには、トリガーになる新しい文化パターンを創造し、それを展開することに尽きると強く認識していた。

藤原も野口も徳大寺も、自国経済に軍事産業を主力産業として組み込んでしまったアメリカが選択する世界戦略へ、すぐ追従している日本の姿が悲しかった。またギャンブルそのもののアメリカの投資金融資本主義を礼讃し追従する日本が情けなかった。そんな不快な価値観をさっさと捨てて、明るい活力のある多様な価値観を展開出来る社会にしたいのだ。

海洋建築設計家の徳大寺亜里抄は地上だけに限定された人間社会の活動域をもっと海洋に展開すれば多様性も広がると信じていた。海洋への展開は海だけでなく空も自由に使えるはずだと理解していた。それは藤原も同じだった。二人の考えに影響されて、木村も野口も海洋では地上での制約のないもつと解放された活動を展開出来ると考えるようになった。それがオーシャン ライフを押し進める原動力になっていた。

そのトリガー作りとして、4人はオーシャン ダイナミズムのコンセプトでオーシャン ビレッジを実現しようとしていた。その具体的な展開を、オーシャン ライフ、プロジェクトとして始めたのだ。それを実行に移せたのは、類いまれな一也の資金獲得能力である。それがなければただの机上のプランに過ぎなかっただろう。一也は自分の資産として500億円を超える資金を持ち、それをほとんど全部注ぎこめた。実際のプロジェクトの展開の資金は、有力な投資家から巨額の資金をオーシャン ライフへ長期投資として獲得していた。一也はこれまでシエール オイルの世界に巨額の投資をしてきた、有名投資ファンド、ブルー マトリックスのオーナーである Dr. ブレッド ウェーバーの信頼を得て、彼から長期投資として巨額の資金を得た。その資金がこのプロジェクトの実行を可能にした。

ベンチャー ラボ , オーシャン ダイナミックス , はオフィスを東京港区神谷町の大通りに面した、10

階建ての白い外壁の沢田ビルの中に構えていた。3階のワンフロアを借り切りの贅沢なオフィスである。

20畳ほどの広さの木村のオフィスの内装は明るいブルーで統一され、非常にシンプルである。大きなディスプレイを3台備えた最新のコンピュータシステムと世界の海洋図、世界の投資地図と大きな地球儀が揃えられている。部屋の正面にテーブルとソファがあり、そのテーブルに竹の盆栽が3つ置かれている。隣の部屋の優秀なアシスタント4人の総勢5人でオーシャン ダイナミックスに関する全ての資金処理を行なっていた。

藤原直哉の部屋も木村と同じくらいの広さである。入口正面の壁側に、大きな机があり、その上と下に大きなディスプレイを備えた最新型のコンピュータシステムと大容量の記憶システムがあり、世界中にアクセスできる衛星経由のコミュニケーション サーバーが置かれている。彼は黒革の背の高い椅子を使っている。机の向こうの白い壁には勿論世界の海洋図が貼られている。他の壁は海洋開発の専門書とコンピュータ関連の専門書が一杯の書棚で占められている。部屋の真ん中に小型のテーブルと簡単なソファが置かれている。彼はいつもディスプレイの置かれている机のそばの背の高い安楽椅子に座って思索して来た。彼も隣の部屋の優秀な4人のアシスタントと総勢5人で、オーシャン ダイナミックスの技術に関する全てを仕切っていた。実際のマネージメントは、シンクタンク時代から信頼する部下だった南に任せていたが。

徳大寺亜里抄の部屋はマール調で巧みに統一されている。部屋のやや左寄りに大きなディスプレイを3台備えた最新のコンピュータシステムと世界の海洋図、日本周辺の海洋図、大きな地球儀が揃えられている。部屋の正面の棚には亜里抄がイメージして来た海洋建造物の模型が据えられている。部屋の中央に比較的大きなテーブルが置かれている。その上には彼女の大好きなクルーザーのミニチュアが置かれている。彼女はこの部屋ではほとんど立って歩きながら思索をしている。彼女はこの部屋から巴建設の海洋部門の全てのメンバーと繋がっている。

やや狭いながら野口が専用に来る部屋も用意されていた。

彼らのコンピュータシステムは最新の高性能マシンである。それは彼らが繰り返し多用する、膨大な情報を基にしたシミュレーションに効果を發揮していた。勿論セキュリティは最高レベルである。藤原の友人のシステムグループが常に最新の技術を投入してくれている。ハッキングされる心配はほとんどない。オーシャン ラボ , オーシャン ダイナミックス , は20人のスタッフを抱えていた。彼等を藤原と徳大寺亜里抄が巧みに捌いて、資料作成と外部チャンネルとのコミュニケーションを担わせていた。

続きは
完成版で
お楽しみ下さい。